

などから増悪する可能性もあるため服薬のタイミングも慎重に選択する必要がある。

P1-13.

HIV 感染症患者における意思決定の葛藤と患者背景の関連に関する検討

(東京薬科大学：医療実務薬学教室)

○石田 恵美、川口 崇、竹内 裕紀
畝崎 榮

(薬剤部)

関根 祐介、東 加奈子、添田 博
明石 貴雄

(東北大学大学院医学系研究科：医学統計学分野)

山口 拓洋

(臨床検査医学)

天野 景裕、福武 勝幸

【背景】 HIV 感染症患者が治療の意思決定をする際に葛藤を生じるとされている。葛藤は、意思決定の葛藤尺度 (DCS) にて測定できる。DCS は 0-100 点で、高値であるほど意思決定の葛藤が生じているとされている。我々は DCS を用いて、HIV 感染症患者が治療選択時に高い葛藤状態にあり、薬剤師の服薬カウンセリングにより低下することを既に報告している。しかし、意思決定の葛藤と患者背景との関連は検討していない。そこで、ART 開始予定の HIV 感染症患者における意思決定の葛藤と、患者背景との関連を解析した。

【方法】 2011 年 6 月～2012 年 9 月に東京医科大学病院にて新規 ART を開始予定の HIV 感染症患者を対象に、服薬カウンセリング前後に DCS の記載を依頼した。患者背景は調査票および診療録より調査した。カウンセリング前とそのスコア変化について、患者背景による比較を行なった。

【結果】 68 名 (男性 67 名、女性 1 名) を解析対象とした。服薬カウンセリング前の DCS スコアおよびスコアの変化について、教育歴 (カウンセリング前: $p=0.9614$ 、スコア変化: $p=0.9597$)、雇用形態 (カウンセリング前: $p=0.7877$ 、スコア変化: $p=0.8031$) では差がなかった。CD4 数 350/uL 以上の患者は、それ以下の患者と比較し服薬カウンセリング前の DCS スコアが有意に高値であった (57.5 vs. 42.6, $p=0.0106$)。

【考察】 患者の社会的背景と DCS スコアに関連は認められなかった。CD4 数による葛藤の差は、抗 HIV ガイドラインの開始基準から CD4 数 350/uL 以上の患者ほど治療開始すべきか葛藤を生じていると考えられる。ART 開始患者の社会的背景、CD4 数に関わらず薬剤師が介入することが重要である。

P1-14.

内視鏡所見と消化器症状の関連性の検討

(内視鏡センター)

○柳澤 京介、河合 隆、内藤咲貴子
杉本 弥子、福澤 麻理、山岸 哲也

(消化器内科)

八木 健二、森安 史典

【背景】 機能性ディスペプシアのガイドラインが発刊され、今後さらに内視鏡所見と症状の関連性が注目される。今回我々は消化器症状と各種内視鏡所見との関連について検討した。

【対象及び方法】 対象は 418 人、平均年齢は 36.9 歳。上部消化管内視鏡検査と同時に血清抗 IgGHP 抗体検査を行った。症状として、胸焼け、腹痛、胃もたれ、便秘・下痢について問診した。内視鏡所見として逆流性食道炎 (RE)、食道裂孔ヘルニア (EH)、regular arrangement of the collecting venules (RAC)、稜線状発赤 (RS)、内視鏡的平坦びらん胃炎 (EFEG)、内視鏡的隆起びらん胃炎 (EREG)、萎縮性胃炎 (AG)、内視鏡的出血性胃炎 (EHG)、内視鏡的発赤性 & 滲出性胃炎 (EE&EG)、内視鏡的鬱血性胃症 (ECG)、内視鏡的ひだ過形成性胃炎 (ERHG)、胃底腺ポリープ (FP)、過形成ポリープ (HP)、さらに消化性潰瘍 (PU) の有無をチェックした。抗 IgGHP 抗体では 10 U/ml 以上をピロリ菌感染陽性とした。

【結果】 ピロリ菌感染陰性 278 人、陽性 140 人である。ロジスティック回帰解析では、胸焼けと有意な関連を有する内視鏡所見はなく、腹痛に関しては、稜線状発赤および消化性潰瘍と有意な関連を認めた。胃もたれおよび便秘・下痢に関しては、胃底腺ポリープとのみ有意な関連を認めた。

【結語】 ピロリ菌感染率が今後急速に低下することが予想される。機能性ディスペプシアを中心とした症状と内視鏡所見の関連が今後重要性を増すと思わ

れる。

P1-15.

人工股関節用メタルインプラントの腐食と合併症に関する調査

(社会人大学院博士課程 2 年整形外科学)

○堀江 真司

(整形外科学)

高橋 康仁、穴戸 孝明、正岡 利紀

立岩 俊之、山本 謙吾

【目的】 2008 年以降、メタル対メタル (MoM) インプラントを使用した人工股関節置換術 (THA) に関する有害事象の報告が相次ぎ、大規模な製品リコールが生じるまでに至った。今回、我々は MoM の材質上の問題点、並びに生体への悪影響に関して文献調査を行い、その関与因子を列挙することが目的である。

【方法】 本調査では PubMed 掲載の国際ジャーナルを対象に、MoM THA に関する臨床および基礎データを収集し、主な再置換要因および機序を考察した。

【結果】 初回 THA 後の再置換率に関する大規模調査では、セラミック、ポリエチレン THA では 8 年間に 2~3% であるのに対し、MoM THA では約 11% と有意に高値であった。MoM THA 特有の合併症には、アレルギー反応、組織壊死、メタロシス、偽腫瘍、無菌性リンパ球血管炎関連病変等の報告が散見され、その最大の要因としてメタルイオンの体内流出が指摘されていた。このメタルイオン発生の関与因子として、(1) カップ設置角; (2) 金属タイプ; (3) ヘッド径; (4) ヘッド-ステム嵌合性; (5) インプラントデザインが挙げられた。また本邦における機種別の大規模調査では、ステム型に比べ表面置換型の方が、MoM 合併症リスクが低い (1.2% vs. 0.5%) と報告されている点から、ヘッド-ネック部が上記合併症発現に特に影響していると推察された。

【考察】 今回の文献調査から、ヘッド-ネック部の腐食に伴うメタルイオン発生が、MoM 合併症の主要因であると考察された。Ti-4Al-6V 製ステムは Co-Cr-Mo 製ステムに比べて、ヘッドとの嵌合性に優れているという力学試験データがあり、フレッキング腐食や隙間腐食の抑制に繋がる可能性があ

るため、この使用がより推奨される。また MoM 大径ヘッド (>36 mm) では摺動面に摩擦トルクが強く作用し、摩耗量が増大するため、この使用を避けるべきだと考えられる。

【結語】 MoM THA は、機種サイズおよび材質選定を見誤ると重篤な合併症に繋がる可能性があり、適応には慎重な検討が必要であると考えられる。

P1-16.

慢性透析患者の閉塞性動脈硬化症に対する血管内治療成績

(心臓血管外科)

○戸口 佳代、西部 俊哉、鈴木 隼

丸野 恵大、藤吉 俊毅、岩堀 晃也

高橋 聡、岩橋 徹、岩崎 倫明

小泉 信達、松山 克彦、荻野 均

慢性透析患者において動脈硬化性疾患は主要な死亡原因となり、臨床上重要な問題となる。当科で血管内治療を施行した閉塞性動脈硬化症 183 例を対象に、慢性透析 37 例 (20%) と非透析 145 例の治療成績について比較検討した。慢性透析症例は、糖尿病、虚血性心疾患を有意に高率に合併しており、重症下肢虚血および下腿病変症例が有意に多かった。腸骨動脈領域にステント留置、大腿動脈以下の病変にはバルーン拡張術を選択する内容に両群間で差異はなく、初期治療成功率、短期治療成績においても有意差はみられなかった。しかしながら、遠隔期死亡率および大切断率において、透析症例、特に重症下肢虚血を合併する症例は有意に不良であった。

慢性透析症例では、他の動脈硬化性疾患を高率に合併し、下肢の予後のみならず生命予後も不良で、生命予後を考慮した治療方針の決定を行う必要がある。